

書 評

「わかる医学用語」

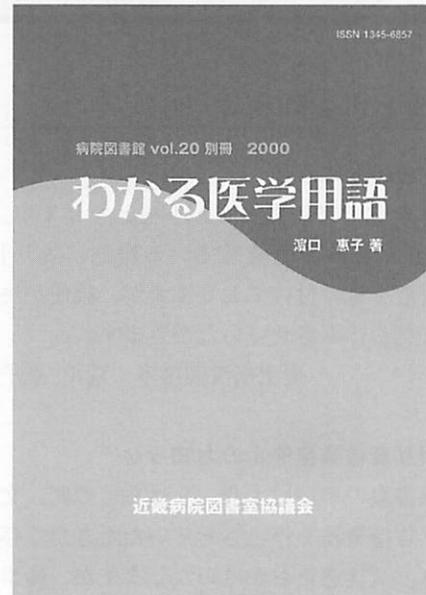
「病院図書館」Vol. 20 2000 別冊

濱口 恵子 著

京都 近畿病院図書室協議会

2000年10月1日発行

A5版 104p 定価1,500円



本書を読み終えた時、20年ほど前レファレンスライブラリアンとして、オンライン検索業務に困惑しながら従事していたことを思い出した。利用者から求められた検索用語にそくしてキーをたたくとき、連結形の作り方や接頭語や接尾語について、きちんと学んでいたら、もう少し落ち着いていられたかもしれない。確かに、濱口さんも参考にされた「プログラム学習による医学用語の学び方」を購入し、取組んでみたが持続できなかったのを思い出します。あのシステムティックなところが良いのかもしれないが、いきなり取組むにはしんどいところがある本でした。

本書は、病院図書室における日々のサービスのなかで、必要と感じられたところから生まれたものです。じっくり医学用語に相対しており、無理のない自然な姿勢が読み取れます。ところどころにほっと息をつける文章が入っており、肩の力を抜いて、気に入ったところから、通勤電車や業務の合間に読めるようになっています。本書の読みやすさは、著者がゆったりとした気持ちでまとめられており、読者が気楽に取組めるようにつくられている点が優れているのではないのでしょうか。癌という言葉とカニの関連、さらに乳がんの形態からの由来など、ややもすると単調になりがちな医学用語学習へ配慮されているようです。また、医学用語ということだけでなく、英語に共通する言葉の知識を得ることもできます。気になった言葉と出会ったら巻末の索引を利用して、言葉の構成要素などについて確認し、語彙を自分なりに増やしていけそうです。

著者の勉強の後を追いつながら自然と医学用語の世界に入っていける。ポケットに入るような小冊子として、このような学習書が執筆され、出版されたことを喜ぶもののひとりです。本書を通して専門用語への親近感が生まれれば、利用者へのコミュニケーションにも自信を持って取組め、情報サービスの質的な向上につながるでしょう。専門的職業人のための生涯学習用教科書は、自分たちで作成できることが理想であり、日常業務の必要が生んだ本書のような企画が、今後とも継続されると良いと思いました。

(愛知淑徳大学文学部図書館情報学科 山崎 茂明)